

人が、街が失われた2011年3月11日の“あの日”。今、ゆっくりと未来へ歩み始めた。被災地の復興に挑む医療者たちの心を届ける

あの日から、
未来へ

南相馬市立総合病院
内科医

坪倉正治氏



環境改善が進む福島第一原発

震災から7年近くなる。先日、相馬地方の医療スタッフと福島第一原子力発電所の内部の現状を見学する機会をいただいた。2、3年に1度機会をいただいております。私自身構内に立ち入らせていただくのは、今回で3回目になる。

職場環境や労働環境が徐々に改善していることを今回も知ることができた。以前は原発から南に20キロメートルの位置にあるJヴィレッジが前線基地となり、そこから構内に向かっていたが、今回は富岡町の施設からの出発。構内では昼食に温かい食事が5種類のメニューから選べ、コンビニエンスストアや休憩所もしっかり整備されていた。商品棚にカップ麺が大量に並び、缶コーヒーが多く売られていることも気になったが、食堂でいただいた鶏そば丼はおいしかった。大熊町にできた給食センターから毎日2000食以上が運ばれているようだ。気のせいか、働いておられる作業員の皆さんの顔つきも、以前に比べて少し柔らかくなったようにも感じる。

汚染水タンクの整備や構内での線量低減対策、廃炉作業も徐々にだが、着実に進んでいた。タンクは漏れないよう古いものから新しいものへの変更が進んでおり、土壌にはモルタルを吹き付けることで空間線量は押さえこまれていた。驚いたのは2号機と大きな爆発を起こした

3号機の間を、バスで通り抜けられるようになっていたことだ。以前はバスの中ですらタイベックを着て、フルフェイスのマスクをして壊れた建屋に近づいていた。その際に放射性物質を警戒してマスクを無意識のうちにきつく締めすぎてしまうのだろう。バスの中でマスクによる頭痛に苦しんでいたのが大分前のようにも感じる。今回は特に服装を変えることもなくバスで通り抜けた。

確かにまだまだ時間はかかる。建屋外壁は、あのときの爆発により崩壊したままになっていたし、2号機と3号機の間空間線量は一時的にとはいえ300 μ Sv/hourを超えた。相馬地方の空間線量の2000倍とか3000倍といった値である（それでも以前よりはだいぶ下がったといえるのかもしれない）。4号機の核燃料は全て取り出された一方で、現在は3号機の上部に燃料を取り出す装置の設置が終わろうとしているところだ。燃料は残ったままである。1号機と2号機は、まだその装置の設置も行われてはいない。目標は2023年ころだそうだ。

今日も数千人以上の多くの方が黙々と働いておられた。実際に作業に携わる人、事務、そして彼らをサポートする人たち。皆慣れた手つきで、チェックゲートを通り、服を着替え、装備をつけ、持ち場に向かう。その多くが福島県民だ。廃炉の道のりは数十年と長く、これからも多くの困難があり、試行錯誤を繰り返しながら進む必要があるだろう。世間の目が厳しいのは当然だろうし、善意が政治的なものも含めた他の意図や悪意に飲み込まれる場面もきっとあるのだと思う。ただ、黙々と働いておられる彼らを見て、医療活動も同じ。目の前の患者さんに対して、できることを淡々と行いながら考えていくこと以外に、地域の健康を守る未来はないと改めて思った1日だった。今回の訪問の調整と実際に現場に関わっておられる関係者の皆さんに感謝申し上げたい。



当日配布されたさまざまな資料